

メアリー・シドニーの『死の凱旋』： ラウラの貞潔とエリザベス表象

大 芝 香 織

序章

メアリー・シドニー、ペンブルック伯爵夫人 (Mary Sidney, the Countess of Pembroke) がペトラルカの『死の凱旋』 (*The Triumph of Death*) の英訳を始めたのは兄、サー・フィリップ・シドニー (Sir Philip Sidney) の死後であると考えられている。メアリー・シドニーはペトラルカの『死の凱旋』の他にロバート・ガルニエ (Robert Garnier) の『アントニウス』 (*Antonius*)、フィリップ・ド・モルネ (Philippe de Mornay) の『生と死に関する論考』 (*A Discourse of Life and Death*)、そして、『ダビデの詩編』 (*The Psalmes of David*) の英訳を完成させている。いずれの作品も、兄サー・フィリップ・シドニーの死後である 1586年から 1590年代に完成したと考えられている (Waller, Introduction 9-10)。

メアリー・シドニーの英訳した『死の凱旋』は彼女の文学サークルで回覧され、長い間、出版されることはなかった。原稿が発見されたのは、法学院インナー・テンプル (Inner Temple) の図書館であり、出版されたのは 1912年、フランシス・バークレイ・ヤング (Frances Berkeley Young) の学術雑誌 PMLAの中である (Waller, Introduction 11)。

イングランドにおいて、ペトラルカの『凱旋』の英訳を初めて完成させたのは、ヘンリー・パーカー、モーリー卿 (Henry Parker, Lord Morley) である。彼はペトラルカの『凱旋』の全てを英訳している。しかしながら、モーリー卿の『凱旋』の英訳はあまり高く評価されていない。その要因の一つは彼がカプレットで英語訳をしていること、さらに、ペトラルカの原文へ

の加筆が多いことが挙げられる。一方で、メアリー・シドニーの『死の凱旋』の英訳はペトラルカの『凱旋』の一部であるにもかかわらず、評価は高い。D.G. リース (Rees) は、メアリー・シドニーの『死の凱旋』の英訳について、詩的に優れており、重要であり、影響力のある文学者の規範であると評している。この高い評価は彼女がペトラルカのテルティマータ (terza rima: 三行連句 iambic体で aba, bcb, cdc...のように押韻する。) を用いて英訳している点やペトラルカの原文に忠実であることによる (82-83)。

リースの論文では、メアリー・シドニーによる英訳の優れている点を論じているとともに、彼女がイタリア語をどのように読み間違えているのかを詳細に分析している。彼女がイタリア語で書かれたペトラルカの『死の凱旋』を読み間違えていることにより、意味をなさない箇所があることを指摘するとともに、ペトラルカの原文より優れている箇所があることも指摘している。メアリー・シドニーはペトラルカの原文を英訳しているだけでなく、ペトラルカの原文に加筆し、原文の表現を省いている。

一方で、ダニエル・クラーク (Danielle Clarke) は、リースの論文においてメアリー・シドニーがイタリア語を読み間違えていると指摘した箇所を誤訳ではなく、意図したものであると主張する。また、メアリー・シドニーによる加筆は、『死の凱旋』のラウラ (Laura) とエリザベス女王を同一視させるためであると述べている。

本稿では、リースの論を基に、メアリー・シドニーがペトラルカの『死の凱旋』を英訳した際に加筆した表現、削除した表現について考察する。また、クラークの論を基に、ラウラがエリザベス女王と同一視されている場合、メアリー・シドニーの『死の凱旋』のラウラの表象がエリザベス1世の表象にどのように関わっているのかを考察する。

1. ペトラルカの『死の凱旋』とメアリー・シドニーの英訳における差異

ペトラルカの『凱旋』は『愛の凱旋』、『貞潔の凱旋』、『死の凱旋』、『名声の凱旋』、『時の凱旋』、『永遠の凱旋』で成り立っている。メアリー・シド

ニーが英訳し、現存しているのは、『死の凱旋』のみである。『死の凱旋』のみを英訳したのか、それとも彼女が凱旋の全てを英訳し、『死の凱旋』のみが原稿として残っているのかを確証することはできない。しかしながら、彼女が『死の凱旋』を英訳する際に、原文よりも優れた作品にしようとしていたという意図が窺える。さらには、ラウラの描写を変えようともしていた。

ペトラルカの『死の凱旋』は2章から成り立っている。メアリー・シドニーは、2章とも英訳している。第1章は、『貞潔の凱旋』において、キューピッドを負かしたラウラの凱旋の描写から始まる。「私」はラウラがキューピッドを負かし、凱旋車に乗って、帰還した様を称えている。ラウラを乗せた凱旋車の行列を眺めている「私」は、ラウラが黒服を着た女性、死神に行くわす場面を目の当たりにする。死神はラウラに彼女の死を告げる。死神とラウラとの会話の後、「私」には死者たちの姿が見える。死者たちの中には生前、権力を持っていた教皇や王族もいるが彼らも死をもって生前の贅沢や権力など全てを失っている。ラウラの死が迫る。ラウラは彼女の仲間に見守られて息を引き取るのである。第1章は「私」が眼にしたラウラと死神との会話、そして、「私」自身の語りによってラウラの死去が語られる。第2章は、ラウラが亡くなったその夜、彼女が「私」のもとへとやってくる。亡くなったはずのラウラが詩人と対話する。「私」は死後の世界やラウラが生前に抱いていた「私」への想いを聞く。明け方、ラウラは天へと戻っていく。

メアリー・シドニーの英訳とペトラルカの原文とも内容に大きな変化はない。しかしながら、異なる点がある。一つ目は、加筆された表現、二つ目は、削除された表現である。

メアリー・シドニーの英訳における加筆については、リースが詳細に分析し、論じている。リースはメアリー・シドニーの英訳はペトラルカの原本よりも、新しい鋭さと鮮明さを与えていると述べ、例として以下の箇所を挙げている。

And foyl'd him, not with sword, with speare or bowe,
 But with chaste heart, faire visage, upright thought,
 wise speache, which did with honor linked goe: (I.7-9)

上記は、1章の冒頭で、ラウラとキューピッドとの戦いについて言及された場面である。ペトラルカの原文では「純粋な心と共に、美貌と、慎ましきおもい想念と、誠心の友なる思慮深き言葉と、ただそれのみを、武器に用いて。」(I.7-9) と記されている。リースが指摘していることは、ペトラルカが武器とのみ言及している箇所¹に実際の武器 “sword,” “speare,” “bowe” を列挙することにより、より現実的な言及にしているということ、さらに、イタリア語の原文においてはいくらか慣習的なそして、はっきりとしないイメージであったものに新たな力を与えていることである (85-86)。

また、メアリー・シドニーの詩のスタイルの鮮明さの特徴をリースは二重の修飾語と彼女の効果的な繰り返しの使用であると述べている。“Now that short-glorious life hir leave to take.” (I.103) “Sometimes the Sunne of my woe-darkened skyes”(II.87). この二カ所において “short-glorious life” そして “my woe-darkened skyes” という表現がメアリー・シドニーが用いた特徴的な二重修飾語である (86)。

一方、多くはないが、メアリー・シドニーはペトラルカが使用した表現を変更、あるいは省略している。例えば、死神がラウラへ発した以下の言葉である。ペトラルカの『死の凱旋』では死神は、「それから、顰め不気味な眉をやや和らげて、言った。『美しき群れを率いる汝よ、汝ひとりは、未だわが毒を味わい知らぬ。』」(I.61-63) とラウラに言う。この行におけるメアリー・シドニーの英訳は以下の通りである。

Then with lesse frowning, and lesse darkened browe,

But thow that lead'st this goodlie companie,

Didst never yett unto my scepter bowe. (I.61-63)

メアリー・シドニーは、死神が持つ「毒」(poison) という単語を省略している。したがって、メアリー・シドニーの英訳においては、ラウラは死神の毒で死ぬのではない。また、メアリー・シドニーのラウラの死神への返答もペトラルカとは異なる。ペトラルカのラウラは「天上にましまして、彼方かなたより、宇宙の続べ、整えます《天主》の、御旨のままに、汝が諸人もろびとにせしことを、わが身にするがよい」(I.70-73) と死神に答える。しかしながら、メア

リー・シドニーの英訳は以下のとおりである。

As lykes that Lord, who in the heav'n doeth raigne,
 And thence, this All, doeth moderatelie guide:
 As others doe, I shall thee entertaine. (I.70-72)

G.F.ウォーラー (G.F.Waller) が指摘しているように、ペトラルカの原文通りに英訳されるのであれば、“do with me as you do with all mankind”と英訳されるべき箇所であるが、“I shall thee entertaine”(I.72)というラウラの返答はペトラルカのラウラよりも積極的な死への受け入れを表している (Notes186)。つまり、メアリー・シドニーの英訳における死神は毒を持っておらず、ラウラは死神の死の宣告を積極的に受け入れているように描かれているのである。

さらに、ラウラの死を仲間が見届ける場面においても、メアリー・シドニーが削除した表現を見出すことが出来る。

Vertue is dead; and dead is beawtie too,
 And dead is curtesie, in mournfull plight,
 The ladies saide: And now, what shall we doe? (I.145-47)

リースは上記の箇所をメアリー・シドニーの英訳の技能が優れていることを示すために挙げている。ラウラの死を悲しむ友人たちの描写における単語の繰り返しである。この箇所においてメアリー・シドニーは“dead”という単語を3語繰り返し、三行目の“said”の韻のエコーはそれ自体が印象的なメロディーとして与えている。一方でほとんど単音節語の3行目は悲しみとラウラの死の光景に対する女性たちの子供じみた無力さを伝えているという (Rees 87)。ペトラルカの原文では「『徳性が滅び、美も優雅も絶え果てぬ!』美しき淑女らは、貞潔なる女人の寝台を囲み、悲しげに囁いた。『われらの行末は、いかになりゆくや?』 (I.145-47) となる。したがって、ペトラルカの原文に忠実に英訳するのであれば、“And dead is curtesie, in mournfull plight” (I.46) という行に“chaste bed”という表現が入ることにより、ラウラの仲間たちの居場所を特定することが可能である。さらに、ラウラが息を引き取る場所が、ベッドの上であることが明白になる。しかし、メアリー・

シドニーは“chaste bed”という単語を削除している。

メアリー・シドニーが“chaste bed”という単語を省略した理由について、Oxford版の *Literary Commentary* では、“chaste bed”の欠落を説明することはより難しい。可能性のある説明は単純にメアリー・シドニーがバランスのある構成に都合をつけるために言葉を省いたのではないかと述べている (Hannay et al. 269)。一方で、ウォーラーはメアリー・シドニーがモーリー卿によるペトラルカの『死の凱旋』の英訳を知っており、モーリー卿の英訳において“chaste bed”という表現が省かれていたことが原因ではないかと指摘している (Introduction 13)。

モーリー卿の英訳は以下の通りである。

“Vertue,” sayde they that were present there,
 “Excellent beutyte and moost womanly chere
 Nowe is deade and gone. What shall we be
 When she is past the death, as we do se? (I.189-92)

ウォーラーが指摘しているように、同じ箇所ของモーリー卿の英訳には、やはり、“chaste bed”の表現はない。しかし、モーリー卿の英訳の特徴として、“chaste”という単語をペトラルカの原文よりも多く使用している点が挙げられる。モーリー卿の英訳では、ラウラが死神に以下のように答えている。

“In these chast companyes (this is true and playne),
 Thou hast no reason, nor yet noo power,
 And lesse of all other in me at this houre;
 Onely the spoyle that thou shalt have
 It is my chast body unto the grave. (I.76-80)

ラウラは、自分の仲間を“chast companyes” (I.76) と称し、ラウラ自身が自らの身体を“my chsast body” (I.80) と表現している。モーリー卿の英訳において、ラウラの“chaste bed”は省略されているが、ペトラルカの原文に加筆することで、ラウラの貞節を強調する意図が窺える。一方で、メアリー・シドニーの『死の凱旋』の英訳において“chaste”という単語が使用されている箇所は“chaste bed”という表現がないことにより、二か所のみと

なっている。それは、第1章の冒頭のキューピッドとの闘いの場面を描いた箇所のみである。

And foyl'd him, not with sword, with speare or bowe,
 But with chaste heart, faire visage, upright thought,
 wise speache, which did with honor linked goe:
 And love's new plight to see strange wonders wrought
 with shivered bowe, chaste arrowe's, quenched flame,
 while-here som slaine, and there laye others caught. (I.7-12)

“chaste heart” (I.8)、そして、“chaste arrowe's” (I.11) という表現のみに“chaste”という単語が使用されており、ラウラの身体に使用されることはない。

メアリー・シドニーはラウラの描写に“chaste”という単語を使用することを意図的に回避していたのではないだろうか。ペトラルカの原文においては、ラウラの仲間たちがラウラの貞潔なベッドを囲んだことにより、ラウラが死を迎えた場所が彼女のベッドであることが明白である。また、ラウラの身体の貞潔を再度確認することができる。しかし、メアリー・シドニーの英訳において、ラウラがどこで死を迎えたのかは、曖昧になる。

メアリー・シドニーが意図的にラウラの描写に“chaste”という表現を使用することを意図的に回避しようとしていたのであれば、その目的は何であったのだろうか。事項では、クラークの論をもとに、メアリー・シドニーの英訳の意図について考察する。

2. メアリー・シドニーの意図

リースは、メアリー・シドニーの英訳は優れていると評価している一方で、彼女が、イタリア語のペトラルカの原文を読み間違えていることを指摘している。誤訳した箇所としてリースが指摘したのはラウラと死神のとの対話の場面である。死神により死の宣告を受けたラウラが死神に「思いますに、あの方が、わたくし以上に、深く悲しむのでは、と。彼の救いは、私の

生に掛かっているのです。そなたがわたくしを此処から解き放ってくれば、感謝こそ致しましょう。」(I.52-54) と言う。ラウラの言う「彼」とは詩人であるペトラルカのことを指しており、ラウラは、自分の死が詩人を深く悲しませることになると慮っているのである。しかし、メアリー・シドニーの英訳はペトラルカの原文の意味を変えてしまっている。

This charge of woe on others will recoyle,

I knewe, whose safetie on my life depends:

For me, I thank who shall me hence assoile. (I.52-54)

リースはメアリー・シドニーがイタリア語の単数形と複数形を読み間違えたため、“This charge of woe on others will recoyle,” (I.52) という英訳になってしまい、本来は“others”ではなく“him”と訳し、詩人であるペトラルカを暗示させるべきところを誤訳していると指摘する(84-85)。

しかし、クラークは、この箇所における英訳は、メアリー・シドニーがイタリア語を読み間違えたのではなく、意図的に変更したのでであると主張する。クラークによると、メアリー・シドニーは敢えて“him”ではなく“others”と英訳することで、当時のエリザベス朝社会における問題を提起する意図があったという。クラークは、メアリー・シドニーの『死の凱旋』の英訳においてラウラとエリザベス1世が同一視されていることを指摘している。イングランドにおいて、ペトラルカの『凱旋』がエリザベス朝の娯楽、パージェント等の視覚芸術で政治的に有効なメッセージを含ませて利用されていた。特に、エリザベス女王の処女性の正当化のために急進派のプロテスタント信者たちは、エリザベス女王のカトリック教徒との結婚問題を回避するためにペトラルカの『貞潔の凱旋』使用している。メアリー・シドニーはペトラルカの『死の凱旋』を利用し、10年以上使用されていたエリザベス女王を処女王として称えるための表現形式に新たに、エリザベス女王の死すべき運命への衰退を示すという表現形式を与えたのかもしれないという。メアリー・シドニーが英訳を手掛けていたと考えられている1590年代には、後継者を命ずることを拒否し続けるエリザベス女王に対する心配が増大していた。したがって、死神へのラウラの返答を“This charge of woe on others

will recoyle,” (I.52) を “him” ではなく “others” とすることで、ラウラが自分の死後に詩人が嘆くのを慮るのではなく、このフレーズをより一般的な用語としているという (139-42)。つまり、後継者を指名しないままのエリザベス 1世が、自分の死後に残された人々を慮ることになる。

このクラークの主張のように、メアリー・シドニーがラウラとエリザベス 1世を同化して描き、また、ペトルルカのイタリア語の原文を読み間違えたのでなく、意図的に変更しているのであれば、前項で挙げた死神の “poison” の省略と “chaste bed” の省略、そしてラウラが “chaste” と表現されることが少ないことも意図的であったのではないだろうか。以下に、クラークの主張するラウラとエリザベス 1世の同一視と 1590年代におけるエリザベス 1世の表象から、メアリー・シドニーが英訳において、“poison” と “chaste bed” を省略した意図を考察したい。

クラークはメアリー・シドニーの『死の凱旋』の英訳におけるラウラの表象と 1590年代までに知られていたエリザベス 1世との表象に同一性を見出している。例えば、“Borne in greene field, a snowie Ermiline”(I.19)はエリザベス 1世のアーミンポートレイトを提起させていること、死神がラウラの前に現れる場面での以下の記述 “when loe, an ensigne sad I might descrie,/ Black, and in black, a woman did appeere,”(I.30-31)とラウラが息を引き取る時の描写 “Pale? no, but whitelie ; and more whitelie pure,/Then snowe on wyndless hill, that flaking falle’s:”(I.166-67) における黒と白のコンストラスト、この黒と白はエリザベス 1世の色として知られていたこと、そのほかにも “right mortall Goddess”(I.124), “chaste heart”(I.8), “faire visage”(I.8)などのラウラに関する記述が 1590年代までにエリザベス 1世に対して他の作品の中で言及されていた表現であることを指摘している (141)。

メアリー・シドニーの英訳したラウラがエリザベス 1世と同一視されていたとすれば、死神が “poison” を持ち、その毒によってラウラが死んでしまうことは女王の毒殺を想起させるため、メアリー・シドニーが意図的に表現を省いたと考えることが出来る。

しかし、『死の凱旋』はラウラが死ぬ運命にあることから、ラウラとエリ

ザベス 1世と関連付けることは危険なことであるということはクラークも指摘している。クラークは、メアリー・シドニーの『死の凱旋』が強調するのは、無常と永遠であり、それはラウラの不滅が確証されると述べている。そして、彼女の名声と永遠への変換は、時と死をこえた無常を強調する表現様式において 1590年代のエリザベス表象の傾向と一致しているという。それは、不自然な様式とその終わりを知らせることに注意を引きつけることで、処女の貞潔や若さの強調を伴ったペトルルカのイディオムの空虚さを示している。メアリー・シドニーは、無常を基盤とする称賛への変化を記すことで、相反するエリザベス 1世の賛辞を示しているように思える。死、それによる永遠はエリザベスのイメージを永遠に生かすことが出来るのだとクラークは述べている (142-43)。

クラークの論において、1590年代のエリザベス表象に変化が生じていることが述べられている。1590年代のエリザベス 1世の表象についての変化はどのように生じたのだろうか。1590年代のエリザベス 1世の表象の変化とメアリー・シドニーがラウラに“chaste”という表現を回避していた意図を考察する。

1570年代後半から 1580年代にかけて、女王の前で演じられる娯楽や馬上槍試合は、急進派のプロテスタント派の宮廷人であるロバート・ダドリー、レスター伯 (Robert Dudley, Earl of Leicester) とフランシス・ウォルシingham (Francis Walsingham) を中心とした派閥によって構想されていた。そして、その上演の目的はエリザベスの未婚の立場を祝うものであり、それは、外交政策と関連があった。主にそれは、国際的なプロテスタント主義に関連しており、プロテスタント主義によるネザーランドでの軍事行動に関連していた (Berry 75-76)。

しかしながら、1590年代にはエリザベス 1世の表象に変化がみられる。1588年から 1590年の間に、4人の宮廷人たちが死去していることに関連があるのかもしれない。1588年にロバート・ダドリー、レスター伯、1590年に彼の弟 アンブローズ、ワーウィック伯 (Ambrose, Earl of Warwick)、1589年にウォルター・マイルドメイ (Walter Mildmay)、そして、1590年にフ

ランシス・ウォルシングラムが亡くなった。彼ら4人の死が、エリザベス朝の政治と枢密院における見解のバランスを変えてしまう。彼ら4人はプロテスタント主義の要であったからだ (Guy 2-3)。彼らの死により、エリザベス1世の表象であった「処女王」の称賛に陰りが見え始める。ハンナ・ベッツ (Hannah Betts) によれば、1588年にレスター伯の死後、すぐに、レスター伯の性的欲求と政治的欲求を攻撃した性的な風刺が書かれたという。好色文学、ポルノグラフィーである。これらの文学は幾分、エリザベス朝宮廷の政治的なメタファーが反映されるため、女王自身の処女性のエコノグラフィーを危うくしていた。これらは比較的プライヴェートな領域に制限されていたが、1588年以降には、出版された作品も出現した。作品中の文脈において、女王を意図しており、それは、性的に、さらには、政治的に女王の立場を危うくしていた (153-54)。また1590年代のうちに、女性の身体に関する性的な概説の記述は伝統的な様式と新たな性的な記述形式の両方に現れ続けた。女性の処女性と貞潔に対する攻撃的な敵意、様々な様式の中で性的な活動に従事する女王あるいはペトラルカのヒロインに関する記述、宮廷の慣習を暴く性交渉のイメージ、性的に名誉を危うくする文脈の中でエリザベスを言及すること、これらの記述は小さいが、しかし、エリザベス崇拜のレトリックの慣習の言説に対する拒否反応の例を示しているという。初期近代のヨーロッパにおいてはいたるところでポルノグラフィーは社会的風刺の効果的な手段として機能した (Betts 156)。

また、フィリッパ・ベリー (Philippa Berry) も1590年代におけるエリザベス表象の変化について言及している。エリザベス朝の初期の宮廷娯楽においては、エリザベスは太陽に関連して、夏の女王、あるいは、自然界に命を与える自然の女神として表現されていた。君主を太陽として表すことには問題はなかった。性差に注目されることがないからだ。しかし、1590年代になると、女王を月と表象する文学が現れる。ジョン・リリー (John Lyly) の『エンディミオン (*Endimion*)』である。月という変わりやすい惑星は女王を受け身であるペトラルカの恋人からの逸脱を誇張しているという (135)。さらに、1590年代初頭に出版された連作のソネットの中に、反ペトラルカと

呼ばれる姿勢が見られる。それらの作品は、決まり文句から成るペトラルカのスタイルへの批判、性と身体の強調、そしてペトラルカ調の詩が女性の恋人にあるとする想像力に関する増大する不安を含んでいる（136-37）。

メアリー・シドニーがペトラルカの『死の凱旋』の英訳を手掛けていた1590年代に、1570年代後半から1580年代のエリザベスの表象であった「処女性」に対する反発を示す作品や反ペトラルカと呼ばれる姿勢を示す作品が出版されるようになったことは、彼女のペトラルカの英訳に、少なからず影響を与えているのではないだろうか。

前項で述べたように、メアリー・シドニーの英訳において“chaste”という表現が使用されているのは、第1章の冒頭で、ラウラとキューピッドとの戦争について言及した場面で、ラウラをキューピッドの攻撃を防御した“chaste heart”（I.8）と“chaste arrowe’s”（I.11）のみである。ラウラとキューピッドの戦争は、『死の凱旋』の前の『貞潔の凱旋』での出来事について言及しているため、時間軸をラウラと死神との遭遇、あるいは、ラウラの死去に置くと、過去の出来事である。ペトラルカの原文に沿うには、“chaste bed”でラウラが息を引き取るという表現が必要である。ラウラの“chaste bed”は「貞潔なベッド」であり、彼女の「処女性」を示す言葉であるからである。

メアリー・シドニーの『死の凱旋』において、ラウラの貞潔を示す言葉は、“Vertue is dead; and dead is beawtie too,/And dead is curtesie, in mournfull plight,/The ladies saide: And now, what shall we doe?”（I.145-47）の“Vertue”がそれにあたるだろう。当時の女性の美德は貞潔であることであったからだ。しかし、前項でリースが指摘しているように、この連は“dead”を3度繰り返している。ラウラの死を表した連であるが、“dead”の強調により、「貞潔が失われていること」を強調しているように思える。

1590年代のエリザベスの表象において、女王の「処女性」に対する否定的な反応が表面化している。メアリー・シドニーは、時代によるエリザベス表象の変化を、意図的にペトラルカの作品の英訳に組み込もうとしたのではないだろうか。“chaste”という単語を過去のラウラの戦争の部分のみに使用し、ラウラの死に際の“chaste bed”を省略することにより、「処女性」や「貞

潔」が強調されたエリザベスの表象が過去のものであることを示し、死にゆくラウラとエリザベスを同一視させることで、死すべき身体であるエリザベスを表しているのではないだろうか。また、過去のキューピッドとの戦いにおいて、ラウラの“chaste heart” (I.8) と “chaste arrowe’s” (I.11) こそが、キューピッドからの攻撃を妨げたことを考えれば、ラウラの武器であった“Chastity”が、失われていること、あるいは効力を失っていることを暗示させる目的で“chaste bed”を削除しているのではないだろうか。

結論

本稿では、メアリー・シドニーによるペトラルカの『死の凱旋』の英訳における表現について論じた。リースの論を基に、メアリー・シドニーが作品に、用いた技法、加筆した表現と削除した表現を確認し、彼女が英訳の中で“chaste bed”と“poison”という表現を省じた意図について考察した。リースが指摘するメアリー・シドニーが読み間違えていたという箇所について、彼女が意図的に変更したものであるというクラークの主張と、クラークが論じるメアリー・シドニーの英訳に込められた意図を確認した。クラークの論では、メアリー・シドニーの『死の凱旋』のラウラがエリザベス女王と同一視されていること、エリザベスの死すべき運命を描くことにより、メアリー・シドニーが無常と永遠を作品の中で強調し、新たな表現様式を与えたことが述べられている。さらに、クラークの論を基に、1590年代に生じたエリザベス表象の変化とメアリー・シドニーの英訳で省略された表現との関連性を考察した。1570年代後半から1580年代にかけてエリザベスを「処女王」として称賛していたプロテスタント主義者たちが、1580年代後半から1590年代にかけて死去した。これより、1590年代に好色文学や反ペトラルカと呼ばれる姿勢が文学に見受けられるようになった。これらの文学はエリザベスの処女性を称賛することへの反発から生まれている。メアリー・シドニーが『死の凱旋』を英訳する際に、ラウラの死に場所であり、彼女の貞潔さを強調する“chaste bed”を省略し、ラウラとキューピッドが戦う過去の『貞潔の凱旋』

を思い起こす箇所だけに“chaste”という単語を用いたことは、“処女性”を強調されなくなった1590年代のエリザベス1世の表象と関連がある。ラウラの身体の貞潔を表す“chaste bed”を省略し、ラウラの“chastity”が過去のものであることを強調することで、メアリー・シドニーは1590年代に生じたエリザベス表象の変化を暗示させているのではないだろうか。

注：本稿で引用するペトラルカの『凱旋』は池田廉訳、名古屋出版、2004年によるものである。

引用文献

- Berry, Philippa. *Of Chastity and Power: Elizabethan Literature and the Unmarried Queen*. Routledge, 1989.
- Betts, Hannah. "'The Image of this Queene so quaynt': The Pornographic Blazon 1588-1603." edited by Julia M. Walker. *Dissing Elizabeth: Negative Representations of Gloriana*. Duke UP, 1998. pp.153-184.
- Clarke, Danielle. "Lover's Songs Shall Turne to Holy Psalmes: Mary Sidney and the Transformation of Petrarch." edited by Margaret P. Hannay. *Ashgate Critical Essays on Women Writers in England, 1550-1700: vol 2 Mary Sidney, Countess of Pembroke*. Ashgate, 2009. pp.137-149.
- Guy, John. "The 1590s: the second reign of Elizabeth I?" Introduction. edited by Jhon Guy. *The reign of Elizabeth I: Court and culture in the last decade*. Cambridge UP, 1995. pp.1-19.
- Herbert, Sidney Mary. "The Triumph of death translated out of Italian by the Countess of Pembroke. the first chapter." "The Second Chapter of the Triumph of death." *The Collected Works of Mary Sidney Herbert Countess of Pembroke*. Oxford UP, 1998. pp.273-282.
- Hannay, Margaret P. , Noel J. Kinnamon and Michael G. Brennan. "The Triumph of Death: Literary Context." *The Collected Works of Mary Sidney Herbert Countess of Pembroke Vol.1 Poems, Translations, and Correspondence*. Oxford UP, 1998. pp. 253-267.
- Parker, Henry. edited by. D.D. Carnicelli. *Lord Morley's Tryumphes of Fraunces Petrarcke : the first English translation of the Trionfi*. Harvard UP, 1971.
- Petrarca, Francesco. *Triumpho*. translated and annotated in Japanese by Kiyoshi Ikeda, U of Nagoya Press, 2004.
- Rees, D.G. "Petrarch's "Trionfo Della Morte" in English." *Italian Studies* vol.7,no.1, 1952: pp.82-96.
- Waller, G. F. Introduction. *The triumph of death, and other unpublished and uncollected poems by Mary Sidney, Countess of Pembroke*. Institut für Englische Sprache und Literatur Universität Salzburg, 1977. pp.1-18.
- Waller, G. F. Notes. *The triumph of death, and other unpublished and uncollected poems by Mary Sidney, Countess of Pembroke*. Institut für Englische Sprache und Literatur, Universität Salzburg, 1977. pp.185-188.

